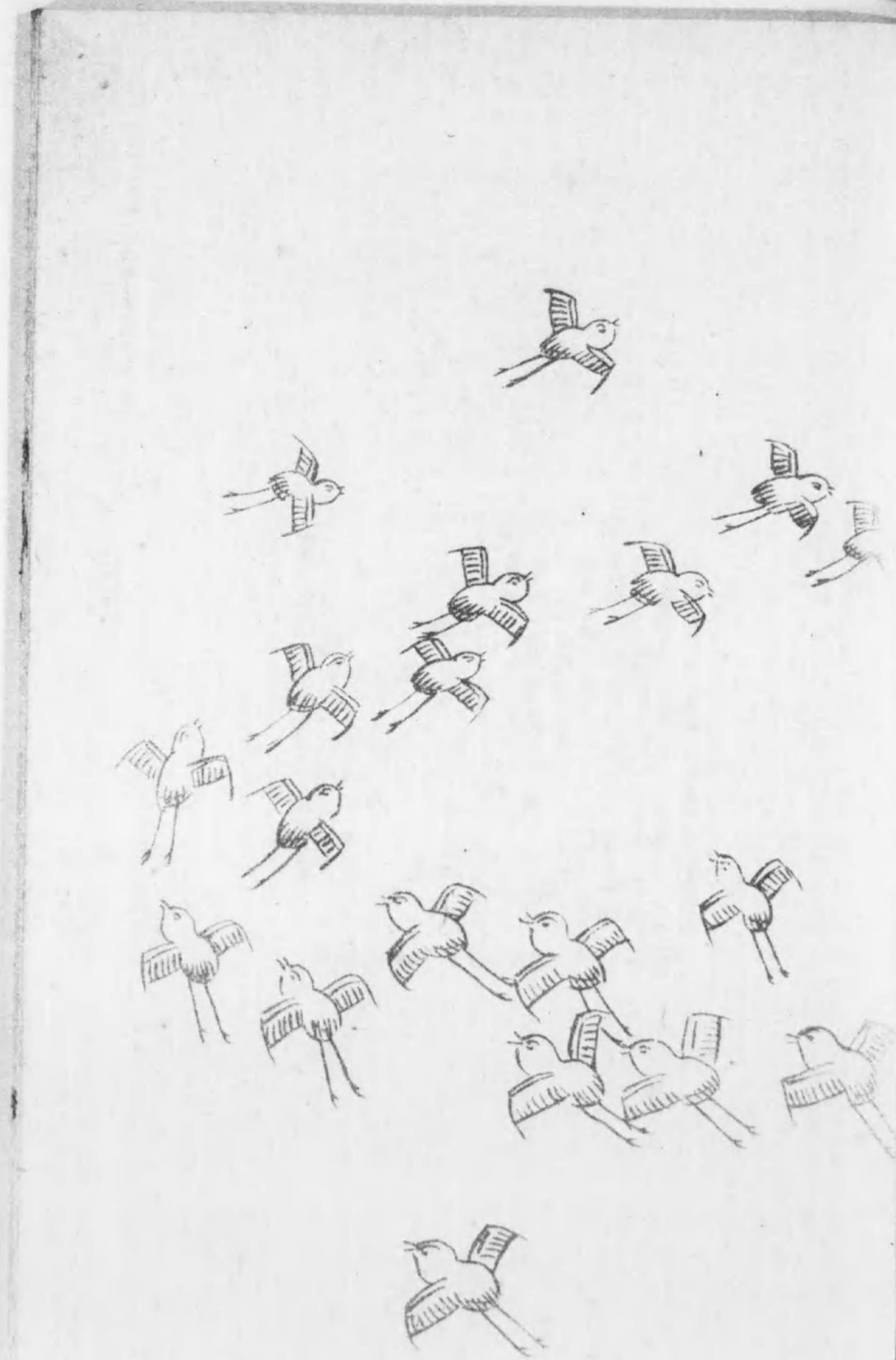
特116
709

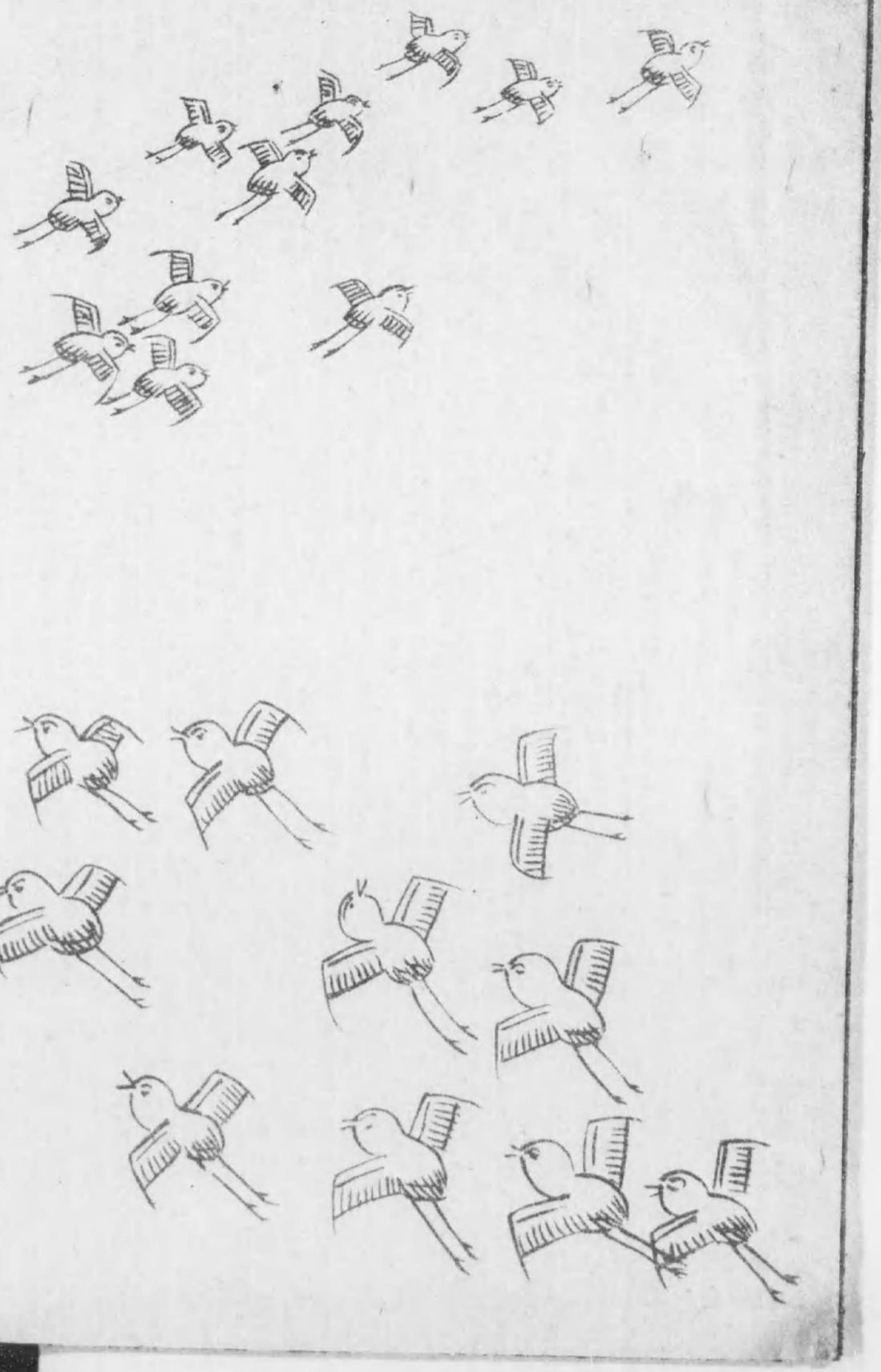
特116
709

觀世流改訂謠本

内十七

右近
女郎花
關寺小町
自然居士
大會





觀清之地

大正
10 11.21
內交

文學博士

井上頼圀　校訂　明治四十年
丸岡桂　本文監修
観世清之　節附訂正　大正五年
丸岡桂　解解并補訂
山崎楽堂　拍子附訂正
観世流改訂本刊行會　節附様式統一　大正十年
山崎楽堂　拍子附再訂正

右近

解題

鹿島の神職、北野右近の馬場の花盛に、北野天神の摂社梅業の神霊の来現を拝せしことを作れり。古名、右近の馬場。世阿弥の五番曲中に「かをりせし右近の馬場の木の間よりのうたひの初くらい、是若此曲也。凡恵永享内より以来のうたひ物、節曲舞なと、落と此曲也と見え、又同じき申楽談儀に「右近の馬場の能、まろことあれ（今は「り」と誤ふ）や有明の、かやうの所、次第〳〵によすべし」又「右近の馬場の能に、はなぐもり、まにてたるぶもも、まだ大事の字也」かと見え、拾竹の五音次第にも前の一節を引けり。持て離れし古曲の一なるべし。異本礼河原勧進猿楽記の覚ふ五年四月七日（二日同）の条組に出づ（流布本には春近）。能本作者註文及び二百十番謡目録に「世阿弥作」。

謡ひ方梗概

神事能なれども常の曲と趣を異にし、番目物のきたる様はいわず。女と前との相違はあれども大体を通じ小謡なども似通れたり。これらを胸に置きて服装の位どことも無く浮きやかにさらりと謡ふべし。

シテ　女の神霊なれば品高く美しく扱ふ。まづ出の笛シは花見の心にて謡ふべし。下歌は調子を改め、赤地を更へて覚りと落着好く、上歌も長用に重くなきやう扱ふ。**ワキ**との問答は隠にてすらりとあらまほしく謡合は朗かに寄せて「見ずもあらず」の終を雅りとなる。後は陪次なれど女神なれば雅ととのみもて品好く謡ひ、「真はわれは」云くの

辭解

雲居の春ぞ 云々　雲居は帝都。帝都の春長閑なるを泰平の世には風枝を鳴らさざるに喩へ、花の春ぞ久しき」（三元の論衡）意に取りなして世を祝ふ。玉葉集に「萬代のたためしを居に始めおきて天上東雲居の春ぞ久しき」

鹿島　常陸國鹿島郡。鹿島地方は古く武甕槌命を祀る。今官幣大社。式内の大社。洛陽　京都。北野　京都上京區の西北隅に在る北野天満宮の社地。古の大内の北に當れるを以て此名あり。

右近の馬場　苔京都上京一條北大宮通（今北野社の東南にあたり、南北に通ずる路）にあり、古、近衛府に屬し、毎年五月競馬の行事ありし馬場なり。

雲の行く　云々　花かと見ゆる雲を追ひて楊を尋ぬる意。しうながら山楊雲を導わぞ行かぬ日ぞなき」。

櫻狩　云々　拾遺集の歌。「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」。

春風桃季　云々　白氏文集の長恨歌に「春風桃李花開夜」とあるを借る。

あくがれ　うかれ。

見渡せば　云々　古今集の歌。「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」。

花車、花見車　花見の牛車。前は車のくるく（極）の音を借りて来る。

ひをとり　古、大内の馬場に在近、右近の花を番つらねて、眞手番唱ひて騎射の事。山州名跡志に「天神宮、此所初朝日寺地也」。天神垂

朝日寺　天満宮の境内安楽寺より北野の社に神雷渡御あり

松も木高き　云々　老松社と、紅梅殿と（後に略く）に通はせて松と梅とを出し、拾遺集の歌「我が宿の梅の立枝や見えつらん思の外に君の来ませる」に掛けて梅を借り、く（来）の音にて紅といひ、初花より花車に乗せ、陰暦三月の異称。

かげふむ道　云々　新古今集の歌「うちなびき春は来にけり青柳のかげふむ道に人をやすらふ」を楊にかへて引く。

人家を　云々　和漢朗詠集白樂天の句に「遠見人家花欲入　不論貴賤與親疎」

昔語　云々　伊勢物語に「昔、右近の馬場のひをとりの日、むかひに立てたり

ける車に、女の顔の下簾よりほのかに見えければ中將なりける男の詠みてやりける」と詞書して「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなくくらさん」とあるを引く。歌の意は見ずと

もなくまた見しともなき人の恋しくはあやなくくらさん」

事なるべし。

口ずさみ　云々　何かあやなく　云々　前の業平の歌に女の方より答へし歌。「知らねば何かあやなくわきていはん思ひのみこそ

たる牛車。

しるべなりけれ」。歌の意は、何とぞ典もなくして知る知らぬを申さんや、思ひ思はるゝ事が男女の道」しるべなりけれ」。歌の意は、何とぞ典もなくして知る知らぬを

今集に「来のまでも花故人の待たれつる」云々と知るべし。

あるを引き、来たるといふを北野にかくちたる時縁を文へ置く几。

花の下に　云々　和漢朗詠集白樂天の詩句「花下忘帰酒一盃」。樽前勧酔是春風」。

云々　古歌。末句「うらやまれめる」。百千鳥の花になるゝ意。百千鳥はあまたの鳥。

き鼻なるに、なほその身の上がうらやまるゝとの意。

うきくして落ちつかぬ心。

名にしおふ神垣　名高き神社。

時めける　春の時を得たると、時を得たる神とに云ひかく。

櫻景の宮所　花櫻と云ひかけて此神の名を出す。山州名跡志に「櫻葉宮、出水通千本東南方にあり。

（中畧）祭る所天照大神。此宮初右近馬場の邊にあり。仍て此地に宮を作り祭る所なり。是故に世人日降神明と号す。（中畧）

時、大陽光馬場の上に降る。

其後當宮を今の二條御城の地に移す。又後今の地に移す」云々。宗祇名所集に「櫻葉の宮、老松

一夜松、皆宮中なり」。

紅梅殿　山州名跡志に「紅梅社、在天王寺前西向、

之霊也」云々。

一夜松　同書天神宮の條に「當神所愛の一夜飛梅の霊神也」。

千松一矣。將生。其地今此所也。故称云一夜松一也」。

老松　同書に「老松社、在右社（天神）西、所祭當神御愛松

「君が袖ふる」までで萬葉集の歌。ふるを古きに云ひかく。あかねさすは紫に懸る枕詞。此歌の紫野

あかねさす　云々

は地名に非ずして紫草の生ひたる野の意なるを、こゝには京都の北なる紫野に云ひかく。そこに大

宮今宮などの神社あり。

御輿岡　後撰集に「北野の御幸に御輿岡にて」と詞書して祝部右大臣の歌「みこしの世とこの年を経てけふの御幸を待ちてなつらん」。北野

社の鳥居外なりと雖ふれど今詳ならず。**神幸**（神の御幸）**御旅居**（神輿のしばらく止まる處。）**岩代の松**（紀伊國の名勝。神ぞとはあらはに何と云はんやの意にて云ひかけ松を待つに懸く。枕詞清經の條にもあり。「岩代の待つことありや有明の月」など詠れも引歌にや。）**有明の月**（陰暦十六夜以後の月。）**久方の**（天に冠する枕詞。）**天照神**（御神。）**櫻の宮**（匠材集に「櫻の宮とは伊勢内宮の御事なり」。續古今集に櫻の宮を詠よめる西行の歌出づ。）**こゝに北野**（こゝに來るを北野にかけ伊勢にては櫻の宮、こゝに來ては櫻葉の神といふ。）**夜神樂**（深夜神前に奏する樂。）**神の代の誓**（天照大神瓊々杵尊に三種の神器を授け、豊葦原の瑞穗國は爾就きて治むべし、寶祚の隆なること天壌と共に窮まりなかるべしと宣へる古事をいへるならん。）**花上苑に**（云々和漢朗詠集に「花開上苑輕雲靚九陌之塵」、漢の武帝の宮中の苑の花盛に九重の宮人車を駐するさまをいへるならん。）**塵に交はる**（佛說に所謂和光同塵、德の光は輕き塵をのみちらさゞるをいふ。）**雪を廻らす**（舞姿云ふ。こゝには神こしき神衣。）**御池**（神前の池。）**うつらふ**（うつろの意。）**櫻衣**（櫻花をかざして舞ふ神の舞す。うら吹き返すとは、さらと吹き返す意。）**花鳥**（花と鳥と、鳥の緣にてとぶさと續く。）**とぶさ**（木の梢。）

ワキ神主 前ツレ（三人又は四人）女シテ櫻葉ノ神（前ハ女）

三月

ワキ（三人）ツヨク「四方の山風長閑なる。四方の山風長閑なる雲居の春ぞ久しき」ト云ヒ中ノリ

ワキ「抑これは鹿島の神職何某とかや我ら事あり。洛陽の名花殘りなく一見仕りてこそ。又北野右近の馬場の花。今を盛なる由承り及ひ。同今日ハ

右近の馬場の花を眺めやりて。なほ
道行上（三人）　打切ヤ
行く。雲の行くやまたやまろべ櫻狩。そなた
まろべ櫻狩。雨は降りぬ同じくば濡る
とも花の蔭なほ行くや。行くもの見ゆる揃より。北野
の森もちかづくや。右近の馬場よ著
きよけり右近の馬場よつまよけり

早引
急ぎの程よ。これかはや右近の馬場よ著
きて。あれを見の人ごと見
そて。車をならべ興をつけ。眞よ面白
うい。暫らく休らひ花を眺めやそ有
やうよ。あくがれ出づる都の空げよ長閑
なる時とや、見渡せば。柳櫻をこき

小書ニヨリ　シテサシ上　ヨワクイ　一声　眞一声ニモ

又、うら又、又又
まぜて。まちを飾る。花車
又、行ゆき
春毎よ誘ひもう。心も見えて櫻の色こそ
下歌カケ
花見車の八重一重
上歌、
●ひとりせて。右近の
右近の馬場の木の間より。
朝日寺の。春の光も天満てる神のち
幸の跡右りて。松も木高き梅が枝の。

能ニテハ
▲以下地謡ニテ謡フコトアリ
●小謡

又、又、又、
豆枝も見えて紅の。初花車廻る日の。
轅、
車や北よつぐらん。轅や北よつぐらん。
早カヽル上
長閑なる頃い弥生の花見とて。右近の
馬場の並木の櫻の。
へぐ、
げよや急よ人家を見て。花あ
れば見ちるあれば。
早附
向ひを見しば女車の。處から

なる昔語(ムカシガタリ)思ひ出づる右近の馬場の。
ひをりの日よ。おもしろかりしかな。人々(ヒトビト)
らぞ。見もせぬ人の恋くらべ。行(イ)
けふや詠(ナガ)め暮(クラ)すと。歌。
まそ。女車(ヲンナグルマ)を詠(ヨ)みしたり。業平(ナリヒラ)の此処
られたり。おらしたり面白の口ぞすみや。右(ウ)
近の馬場のひをりの日。向(イ)ひよりてる
女車の處からなる昔語(ムカシガタリ)。恥かしげら
今ぞ我が身のうらめしき。業平(ナリヒラ)の。何らあや
なく。わきていもとは。かゝれん。思(オモ)のみそまさるべ
なりしを。早(ハヤ)すぎうき詠(ナガ)め言(コト)の葉の。
其蒼路(キカセヂ)もこゝなれば。今よりやうき言(コト)
向(オ)ふ人も。そもなれもせぬ人なれども
唯花ゆゑよ北野(シテ)の森よ。詞をかも

せば　見ぞもあらぬ　●見もせぬ人や
花の友。朝見もせぬ人や花の友。知るも知
らぬも花の蔭。相宿りして諸人の。
もつゝらなれて花車の。舁くも末の
下ゆ。下り居ていざや眺めんげによや花
のもと。帰らん事を忘つゝ。美景よよ
りて花心。馴れ馴れそめて眺めんいざ

いざ馴れて眺めん。百千鳥。花よなれ
行く、越行身ぞはかなき
上の空の心なれや上の空の心なれ
●げよ名の負よ神垣や。北野の春も
晴めける。神の名所歟とよ　眺むれぞ。
都の空の塩竈や。霞みわたるや北の
宮居。誰賞見せよ時を得て。花櫻葉の

地拍子
あかねさす紫野行き。標野行きも

宮所（地上）花の濃染の色わけて。こおばしう梅咲匂ひ
紫野行き。標野行き（地上）野守は見ずや君が袖。古きも今の景の空もあかねさす
又いにしへ八重咲く幸の物見とて。車もとどろに七神の
立ちやすらふ興圖こそ此七神の本の旅居の。
右近の馬場わたり神幸ぞ尊かり

ける。（地上）あらありがたの本事や。かくも妻〳〵語りぬる
猶こゝ教へおもらしませ（地上）眞かわれい此
神の。末社と現れ君が代を。守の神と思へ〳〵（地上）よろこび向けがありがたや。
守の神そいませそれの霊神まそ。
かやうよ現れ給はらん（地上）あら恥かし

しや神ぞそ。あさまよハ何そ君代の
地上歌 待つことありや有明の待つことありや
有明の月も曇らぬ久方の天照る神
もそハ。櫻の宮そ現れとそ北野の櫻
葉の。神そタべの空晴れて月の夜
神楽を待ち給へそ花よおくれ先せよ
けりや花よ隠れ先せよけり 中入

日上歌 待謡
げよ今そとも神の代のげよ今そとも
神の代の。超言ハ盡きぬ験そ。神そ君
との門恵。眞ありがたや眞
ありけりありがたや 出端 後シテ上
畏き代を守るも。右近の馬場の
春を得て。花よ先へ匂ひて。軽軒
九門の塵よ立つる神慮。和光の影も

雲あまき。君の威光も景高く。花も搖
ぎぞしまる風ものどかなる代のめでた
さよ　地上「雲あまき。天照る神の恵を受
けてハ。櫻の宮居と現れ給ひ　ここよ
北野の。太鼓頭神の宮居よ　地「花櫻葉の
神と現れ。影さゝぬ威光を顯す　衣の。
袖もかざしの。花ざかり　中ノ舞　打上打返　日も照り

添ふ花の袖。打返　日も照り添ふ花の袖。雪
を廻らす神かぐらの。手の舞足踏拍
子をそろへ。聲もみ渡る。雲の掾。花
よ戯れ。袂よ結ぼゝれかざしも花の。
糸ざくら　破ノ舞　打上打返　地「治まる都の花盛
治まる都の花盛。東南西北も音せ
ぬ波の。花も色添ふ北野の春の。池

女郎花

解題

「小野頼風と契りし女、男の心変りを恨みて放生川に身を投げしが、其之魂女郎花となりて塚に生じ、頼風を恨みて寄れば則ち靡き退けば則ち靡き背く。頼風哀に思ひ、これも終に女の後を追ひて空しくなりぬ。男山なる二つの古墳は其二人の遺跡なり」といふ俗説に基きて作れり。謡曲以前に見出でず。謡曲拾葉抄、謡曲拾葉抄等に典據として挙げたる謡曲は後世の若にして、寧ろ謡曲に生ぜる傳説を記したるものと云ふべく、今現に男山に其古跡と称するものく存すれども亦謡曲が生みたる後世の假托と見るべし。こゝに小野頼風の名は小野系圖は固より一切の古書に無く、實在したる人とも思ひ難し。曲の古名を頼風と云ひ、演奏の記録は金田口猿樂記に永正二年四月勧進猿樂三日間の番組に出でたるを初見とす。能本作者註文に世阿弥、二百十番謡目録或は此曲の黒名なるべしと思はる。又諸種の名寄（曲名集）に男山とあるは

謡ひ方梗概

適にてあはれ深く、情を含んで雁りとあるべし。**シテ**「小野頼風の妻若は如何にもてなすべし、以下**ワキ**との問答はあまり仔細に出、以下**ワキ**との問答はあまり仔細に出、頻次住大しづ〳〵進む。「此附らが宜し。**呼掛**は抑へて静

す、シテとの問答は荒くなるめやう意を留めてシテを引き立たしむべし。**地**「影の如くに」はさらうと出づ。**待謡**は落着きて少し〳〵哀しげに謡ひ更へて徳に出で、**上歌**ようよう引き立てために謡ふ。「頃は八月半の日」の**下歌**は更へて前の下歌程に静なるず。**上歌**は石清水の霊地かなるを賞ふる意なれば、心持慎重に音を龍め、稍さらうと詩藻に渡らず。「霊地かな」と少し〳〵鎮め、「巌松峙つて」以下緒にて雄大なる景色の展望に移り、前よりも稚りと、廣々と謡ひなす。大切の地所なれば好く心附けあるべし。「峯〳〵や古へを」とは前の景を承けて附け、景を龍めて餘り運ばず。「消えにし魂の」云々をかゝつて大象りに謡ひ、「てて」云々は更へて抑へめにやすらうと附く。**クセ**は出を静に、以下稍さらうとしたる心、上端後は引き立て、運びよう、終は常の如く静めず、「あら面浮や恋しや」と、景を掛けてすらうとして引に起す。拳りは大抵のて、若意の餘り佛果を頼ふ心の切なるを鳥し、「露を命と」より平乗りに更へて少し〳〵陰の、「花の一時を」以下唯うと云ふ。

注意すべき謡ひ方

二枝表、ワキの詞の中、「実落しの音信より出て」より上げて、廻しの末を中ノ浮キに落す。次の「月」と共に詞に謡ひ過ち易き處なれば注意すべし。「中」とあれども、これは上音を抑へて出、「頼風」の頭を龍めてメリバリ（乙張り）に張る。善知鳥の「木曽の麻衣」楊貴妃の「その初秋の」の詞に出では誰うも、音を龍むる處、切も如く扱ふなり。

辞解

松満潟 肥前唐津湾の隠名。**不知火の** 筑紫潟も、廣く九州（主として北部）をも称し、其北部沿海の港湾を筑紫潟と云ふ。**山崎** 摂津と島郡の地。山城の大山崎に地を接す。淀川を隔て男山を望むべし。**石清水八幡宮** 山城國綴喜郡男山にあり。應神天皇、神功皇后、玉依姫の三座を祀る。貞観元年、行教和尚、宇佐の八幡を勧請しその意。宇佐八幡は豊前國宇佐の東、宇佐亀山に鎮座す。**女郎花** 云々 男山は古来女郎花の名所。**野草花を** 蒂ぶ 云々 男山は古来女郎花の名所。**野草花を** 蒂ぶ 云々 男山は古来女郎花の名所。**花の色は** 云々 本朝文粋、源順の泉女郎花詩に「花色如葉黄、俗呼

為女郎一則名敗醤歟実猶考之、恐是二表前首似稍」。謝霊集にも出づ。僧老は夫妻の契。あだの名をやたちなん」誰の文は多くある花の中にて此一本を何故ぞ折り給ふぞとの意。羅りけるものゝ安楽寺の梅を折りて侍りけるを夜の夢に見えけるとなん」と詞書して、「情なく折らん人つらし〳〵わが宿のあるじ忘れ給ふなと」と有り。折りてを向ふう作れや。**折り取らば** 云々 後撰集僧正遍昭けんには早きをに奉るとなり。たぶさはを。この世の佛は過去現在未来の三世の諸佛。**僧正遍昭** 古今集、仁明天皇の寵臣良峯宗貞の法名。宗貞朝に仕へて左近衛少将たりしが、天皇の崩御を悲みて出家し、遍昭と云へり。**名にめでて** 云々 古今集に出でたら遍昭の歌。下の句「われおちにきと人に語るな」。古註に「嵯峨野にて馬より落ちてなほ」ありと人に落るなとの意。落つるは女の為に魔着すらの由を忍摺の衣にかく。忍摺は忍草を摺りて乱れ染にうたる衣。**女郎と契る草** 女郎花。前に出せる源順の詩句によりて称る。桃の袴に浸け草の名に寄わせて女と契る意にとうなづたり。**草の枕** 後撰拾遺集「女郎花ふかき草の枕もかは」とかく云ふほどの事にてもなく〳〵の意。**行き過ぐる** 古今集の歌。歌の意は男山を指りて立てる女郎花ぞと思ふにつけ、物憂きものに見なし歌に就きてその花の由来を知らん人の意。**名にめでて** 前掲遍昭の歌の詞を借る。**なまめきて立てる** 云々 古今集の遍昭の歌「秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花もひと時」。歌の意は秋の野にこびを含みて立てる女郎花も、唯一時のはかなきさ世の中よとなり。**うしろめたくや** 云々 古今集に「女郎花多かる宿に引ともしうしろめたなくもみゆるかなとは不安心の意。

られも女に寄て作れる歌なり。**邯鄲の仮枕**　云々　火年、邯鄲の里にて不可思議の枕を借りて眠り、栄華といふ夢の様の時間に五十年の栄華を夢みし、人世夢の如きを悟りえたる故事。此事謡曲邯鄲に作り。

尉　老翁　**和光の塵**　仏法に和光同塵といふ。度の為に徳光を和げて世塵に交はり、衆生と法縁すること。**うろくづ**　魚類。**生けるを放つ**　毎年八月十五日に放つ神事）。謡曲放生川に放つ時もあり」　詞。**神の御幸**　神輿の渡御。放生会の時、山下

云々　古今集の歌「今こそあれ我も昔は男山の（魚を放生川に放つ）ものを」。さかゆくは栄え行くをいふ。

の宿院に神幸あり例なり。この宿院を振慶といふ。**久方の月の桂の枝に**　云々　後古今集の歌、下の句「さやけき影は変からかも」。月の異名を桂男といふを受けて男山と続け、月の桂の男山故所からして月が明けき若ともなり。又方は月の枕詞。**かげろふの**　月の光、紅葉の色などに照らされて目の光も奪はるる由を、石の枕詞なる「かげろふの」にきびかく。**苔の衣**　僧の無き出家の法衣。**二つの袂に**　云々　この袂とは二衣、即ち袈裟。行教和尚、珠陀霊夢をえて初めて宇佐八幡を男山に勧請し、観音、勢至の二像の袈裟に影を映したる故事。又本

放に「石清水すみはじめけん月影の二の衣に影をうつし」。**しるしの禰**　神神雅勤清の霊号。百洗放其他に見ゆ。**神宮寺**　社に附属したる寺。石清水八幡にも此寺あり。**旭の巓**　男山の西にある山。**三千世界**　云々　世界の暑仏教にいふ一切世界。**千里も同じ**　白楽天の詩句「三五夜中新月色、二千里外故人心」に寄せていふ。**米の玉垣**　米色の神社の山上の眺望広き為。月夜の明けきにかく。**御戸代**　神前の戸。それにも参詣をいひかく。**かけまくも**　云々　口にかけて云はんなるを次句に云ひかく。**男塚、女塚**　今金剛寺前町の民家の背後に女郎花塚として小野頼風の妻の墓と伝ふるものあり。頼風の墓と伝ふるも傍にありといふ。後人の仮托なり。此曲に作る所はその山の名、男山にて、土地の名草、女郎花なるより、男女の語に因み、てせ出だされたる伝説なるべし。或は求塚の伝説に系統を引きたるものか。**小野の頼風**　仮托の人名。実

在の人の如く伝へたるは謡曲以後の事なり。**思ひ頼風の**　思ひよるといふを受けて出し、風の吹けといふを受けにかく。**新古今集の歌に「曼荼羅ゆくをしかの角のつ**　新古今集の歌に「曼荼羅ゆくをしかの角のつ

いもがみを」。　末の句は新古今の時間の意なるを、いもがみをの一つかのもとも忘れず思へ

の南無幽霊　云々　回向文なり。生死の迷界を出でて速に九相詩に「野外人稀何物有、挙屍独歌不能収」とあり。求塚は鹿永の古曲なれば此曲は恐らく振みろ意を添へていふ詞。葛の葉は風に裏返ると続け慣けしたるを前後して出し、裏見ろ意を離れ振む意のみにて用ひたり。**亡魂**　亡き人の魂。**法の聲**　後生菩提の業秋に云々　風に裏返るを再び改変に帰る意にとりなし、裏見ろ意を離れ振む意のみにて用ひたり。**葛の葉の**　女郎花に掛く。**放生川**　男山の麓をめぐれる川。**あへなき**　はかなき　**草の秋も**　云々　女郎花の葉に置く露を女の袖の涙と見、我袖の涙を露と見て、せめて互の袖の露を払れしめんと立ちよりたら心なり。**貫之**　紀貫之。醍醐朱雀の朝の歌人。古今集の撰者の一人にて其序の筆者。**男山の昔を**　云々　貫之の古今集の序に「男山の昔を思ひ出で、女郎花の一時をくねるにも歌を云ひて

も一時」の歌につきて云ひなるなるを、こゝには前掲「我も昔は男山」の歌、女郎花の一時とは「花

と　文章をいふ。古今集の序をさす。**むざん**　哀れ。同じ。**閻浮**　閻浮提の略。此世の中。**邪嬢の悪鬼は**　云々　邪嬢は仏の戒めたる十悪の一なれば、邪婬の悪鬼に責めらるゝをいへり。往生要集に「取地獄人一道刀業林、見彼樹頭有二好瑞生厭飾婦女一知是男身内、次割其筋、如是勝割一切衆」。已得上脚、已見彼婦女一復在於地、次破頭腹一上着罪人一作如是言、念汝因縁我到此衆、汝今何故不

水茎のあ

来近我、何不犯我。悪人見已欲心滅盛、次第復下。刀業向上、利如剃刀、如前過劇。念力（思ひ込み）一切身分、既到地已而復上掛。如是無量百千億歳」云々。悪人見已、而復上掛「地獄の絵の剣の枝に人の貫かれたると見て」と書し
たる才。剣の枝の撓むまで云々（金葉集に「地獄や剣の枝のみのかれるなららん」。
臺　極楽浄土の蓮の臺。露の臺
という成語を借りて陳く。花の縁に座と（これも花、それも花なれば、同じ縁に往生せる後へとかゝり。

四番目
畧二番

女郎花（ヲミナメシ）

八月　後ヅレ　小野頼風ノ妻ノ霊
シテ　小野頼風ノ霊（前ハ老翁）
ワキ　僧

（見ぐるみ程よき）
（平句）
こゝは九州松浦潟（マツウラガタ）より出でたる僧よ
てゐ。われ未（イマ）だ都を見ざる程よ。此秋
思ひ立ちも都よ（ノボ）り（道行上ヨワクなり）
松浦の里を立ちいでゝ。未（イマ）不知火の筑紫潟（ツクシガタ）そゝら
後よ（ノチ）遠（トヲ）ざかる。旅の道とそ（ノミチ）遙（ハルカ）なれ旅

の道とて遙かなれ　急ぎの程よ。これ
はや津の國山崎と　申や。向ひよ拝
まれさせ給へ。石清水八幡宮ぞ。
座ぞ。我が國の守佐の宮ぞ。一體あれば。
来らでやと思ひぬ。又これなる野邊よ
女郎花の今を盛と咲き乱れての。
立ちより眺めでやと存ぬ　さても男山

麓の野邊よ来て見れば。千種の花
さまんまで。色を飾り露を含みて。
中の音までも心あり顔なり。野草花
を帯びて蜀錦を連ね。桂林雨を拂
て松風を調む。此男山の女郎花ぞ。
古歌よも詠まれたる名草なり。これも
二つぞ家土産なれば。花一本を手折ら

んで。此女郎花のほとりよ。立ちよれ（シテ）
呼掛
のう（ワキ）其花お折り給ひそ。花の色は薫
せる栗の如し。俗呼ぶって女郎とも。
戯れな名を聞くとだよ偕老を契るて
いへりまってやこれ
咲ける女郎花の。多かる花よ取り
わきて。など情なく手折り給ふ。あら心

出家の所身よも

なの旅人やな（ワキ）まそまゐ。まことまゐ。此ほどに咲き乱れたる
女郎花をお惜みなされそ（シテ）惜み申さ
とそ理。この野邊の花守ってい
假令花守ともまゐ。苦苦しくも
出家の身なれば。佛の手向と思ひめ
一本所望申さばや（シテ）げにく出家の

手向けよと

吾身なれば佛よ手向で思よべけれぞ。
かの菅原の神本よも折らで手向け
よと。其外古き歌ども、一云、イニ、甲ニ、乙ニ、丙ニ、
さよ繁うとてなどらん。三世の佛よ花奉る
なぞいへぞ。猶更此家の主身よとて。
猶も惜み給よべけれ 早やうよ古
き歌を引ばや。何とて僧正遍昭い。名よ

人よ語るなと

めでて折れるぞ女郎花そ詠み
給ひけるぞ しいやされがとてわれ落ち
ぬきて人よ語るなと。楽く信まの摺
衣の。女郎と契る草の枕を。ならべ
までハ疑ひなけれぞ。其所喩を引給
やうぞ。此家の身もそれ
向けが戯れなどら色香よめづる花心。

行

そ(ヨ)ぐ申(マウ)そよ。暇(イトマ)申して帰る
そ。もて来(キ)し道(カン上)よ行き過(スグ)ぐる（シテ）おう（ワキ）
優(ヤサ)しくも所の古歌(コカ)をば知ろめたり。
女郎花(カン中ヲミナヘシ)（ワキ）
男山(ヲトコヤマ)より（地下歌中）見つつぞ行き過(スグ)ぐる。
人や花(ビトヤハナ)（シテ）
名(カテ)をめでく(ヤサ)（ワキ）優(ヤサ)しの旅
（シテ）
（ワキ）
（シテ）
（ワキ）
（シテ）
（ワキ）

シテ
「此尉こそ唯今山上をう者ともそゆへハ幡
へのゆ道去るべ申ゆべーとなたへゆけいり
早カハ上
ゆへ」　向きよ起ちて貴くありがたた
シテ　山下の人家軒
をも並べ　和光そ
ウハノ
学む魚類へげ
き拾ふもあらたうて恵そ繁き男山。

地拍子
半の日
又
半の日
●獨吟

禁行く道のありがたさよ　地下歌中　頃ハ八月　舎
半の日。神のあ
拝み　上歌
の男山。さやけき影ハ處から。江葉も
照り添ひて日もかげろふの石清水。
若の衣もたへなりや。三つの袂よ影
うつる。志るしの笞を納むる。法の神

寺あり。靈地なり。鹿松山に登りて、谷廻りて諸木枝を連ねたり。九鳥の崩越一事見れば。三ぢ世界もよそならぬ千里も同じ月の夜の栖のまゝ、、、、、玉垣古戸代の錦かけまくも忝なふ、、、、、石清水八幡宮と拝む。これぞ霊座ゆへよく〳〵拝み給へ。ばや日の暮れてゆくべ。御暇申べ〳〵のう〳〵女郎花で申もし〳〵。事ハ。此男山よつまたる。いやわれてゐるかをらいで。戯れを申ゐも。徒事ぢそ。男山よつまたる謂ぞゆへ。又此山の麓よ。男塚女塚

そていを見せ申べし。こおたへ所のう
いへ」これなるハ男塚。又此方なるハ女塚。
この男塚女塚よつゐて。
もいこれい夫婦の人の土中まそてい
早「さて其夫婦の人の國ハ何處苗字ハ
いふなるへやらん」女「都の人。男ハ此
ハ幡山よ。小野の頼風と申しへ人

地上歌「恥かしや古へもを。語るもさもそ
ありけり。申
待謡「夜ルとも。牡鹿の
角の塚の草。
早上歌「夢の如くよ失せよけり 中入
末隠れて夢ま
たよりもを思ひ起
きねへなき跡も。誰ゝ稀よも弔ひの。
牡鹿の角の塚の草。
夢の如くよ失せよけり

弔ふ法の聲、立てく。南無遊雲出離
生死頓證菩提、後シテ上ツヨク出端おう曠野の人
稀なり。我ゞ古墳ならそゝ何物ぞ
屍を争ふ猛獣か、。捉ぶるよ能をぞ。
シテ上ツレ又ワキ又
あつぱれや。向けば昔の秋の風、うら
ミニクム又ワキ又シテ上カヘ
紫ゝ葛の葉の帰らぞ連れよ。妹
地上ワキ又ツレ又ワキ又
背の君、背そよ魂の。女郎花。
打上ワキ

花の夫婦ハ現れたり。あらありがたの。
ワキ上ツレ上ワキ上
法やな。景の如くよ魂の現れ
給よ不思議さよ。わらやの都よ住
ツレ上ワキ上
みし者。かの頼風よ袂をとめしよ
シテ打
ゝ契のさとりある。人まを真と思ひ
ツレ上ワキ上ヒト
けるか。女心のはかなさ。都を獨
ヒト
あくがれ出でゝ猶も怨の思ふかな。放生

だにも身を投ぐる川よ」と頼風これを聞きつゝ。驚き騒ぎ行き見れば。あへなき死骸なりけり。そよ上げて。此山本の土中より籠めよとて。其塚より女郎花一本生ひ出でたり。頼風心よ思ふやう。さてい我ゞ妻の。女郎花となりけるよと。なほ花色もあつ

かしく。草の袂も我ゞ袖も。露繁れそめて立ちよれや。此花怨みたる気色まで。殊のよれば扉き退きよ。立ち退けばもそのごとし。退けばもそのごとし。貫之も。男山の昔を思うて女郎花とのやまでもおつかしや。頼風その一時を。くねると書きし水茎の

時よ。かの哀さを思ひそ。むざんやな
われや名よ。よしなき水の色に消えて
徒なる身そなるも。偏に我が科ぞかし。
若切ほせよ行まぬまでと同じ道よ
あらんそ。地獄の底迄も貴て此川に身を投
げて共に土中に籠めよ女塚
よ對して男山と申なり其塚ハ

「仕舞ニハ謡ハズ

これぬしわれなるぐらまりたり。跡
弔ひてたび給へ跡弔ひてたび給へ
上元又云「おら鬼ぞ。いでや邪婬の悪
鬼ハ身を責めて。邪婬の悪鬼身をせめて。其念力の道もさまーき劔の
山のよそ窓ーまぐ人ハ見えたり喜ーぬやそ。行きのぼれぞ。劔ハ身を通

地拍子 おなかりける 又 おうなかりける

合方

解かぬ骨を碎くとそそもいうよ恐ろや。劔の枝の。撓むまでいうなる罪のおもれるはてぞや雪。よるなかりける。花の一時を。くねる。露の臺や花の縁。よるも夢ぞ女郎花。罪を浮めてたび給へ。

關寺小町

解題

小野小町百年の姫となりて關寺の邊に住み居たる時、七夕星祭の夕、關寺の僧雅紀を連れて其庵に音づれ、歌語を聞きて舞を舞ふといふが一篇の筋構なり。やがて伴ひ行きて共に星を祭る。小町昔を忍ぶに堪へずして小町の果なるを知り、小町使に長壽を保ち、晩年世に捨てられて乞食となれりといふ傳說に出でたる作なり。後世世阿彌の作と傳ふれども、世阿彌以後の人たる一條兼良の愚見抄及び鵜鷺記に因るもの、如し。

辭解

待ち得て今ぞ云 牽牛織女の二星、年に唯一度陰曆初秋七月七日の夜天の川に會ふと云ひ傳へたるより、七夕祭とも乞巧奠とも云ふ。

星の祭 七夕祭 夜庭前に机を据ゑ、五色の糸を竹にかけ香華菓など供へ、琴を置き歌を書を掛けなどして星を祭る。

關寺 伊勢物語愚見抄に「小野小町になりて近江國關寺のあたりに智證大師これを見て寺に清ぜしも、身のありさまを恥ぢそけかず、針に乞食となりて露命をつなぎ居りしに、一時悉良と云ふ曲の創作と伺等かれども洋ならず。今大津市關係あるには非るか。關寺はもと逢坂山の麓に在りきと傳へらるゝ一條悉良の著者と傳へらるゝ一時悉良と云ふ曲の創作と伺等か神出町なる長安寺は其址なりと稱し、境内に關の清水 小町庵などあれど後を搗き離し。

現々たる 和漢朗詠集白居易の詩句「蕭颯涼風與衰鬢、誰教計會一時秋」を借り、一時に來る初秋と續く。原意は蕭颯たる涼風と我が鬢の衰とを誰かかゝる神佛に物を祈ること。

糸竹呂律 糸は絃樂。竹は管樂。呂は六種の低き樂音。律は六種の高き樂音。

向の道 最通。願の糸 白居易の詩に「憶得少年長乞巧、針樓頭上種糸多」。又、公事根源に「竿の端に五色の糸をかけ、一事を祈るに、三年のうちに必すかなふといへり」。此故に乞巧と申すなりと云ふ。

はへて のばして。

錦のはた薄 絃遠鼻の歌「琴の音に峯の松風通ふらし」云々と胸におきて松風を云ひ、松風の聲も引かふ薄。五琴は美しき琴の假名。旗薄は穗の出でたる薄。

手向に遺ひなりといふ。**朝に一鉢を**云〻朝に一椀の食無けれどもおもひん方無く、夕には破れたる麻衣肌を隠すに足らざれども補ふ便も無しとなり。鉢は食を入る、器也。袈裟は衣の組まなる衣、おぎぬふは補ふの意。今「便あり」と濁へるは古く「便なし」とあり「便無し」とあり。改めたきものなり。**花は雨の**云〻景物に富める詩「花圃雨過紅将発、新被風敲緑漸低」とあり。**人更に若き事無し**和漢朗詠集に「人無更少時須惜」云々。安達原に「人更に若き事無し、況には老となるものを」とあるを悟りて光の萬と続けしにや。**百轉**数多く轉ること。古今集の序に「埋れ木の人知れぬ事となりて、きめなる所には花薄穂に出すべき事にもあらずなりにたり」。理永の云〻永き春日に鳴きくらすらん。理永のは人知れず出すべき事にもあらずなりにたり」。理永のは人知れず出すと云はん為。花薄は穂に出すと云はん為の序なり。こゝには小野の身の世に埋れて今はあらざるに譬ふるべきに非ざるを宮す。**心を種として**云〻同序に「難波津の歌一首は歌の父母の様にてそ手習ふ人の初にもしける」。**それ歌は**云〻同序に「この歌天地の開け始まりける時より出で来にけり（中略）千早ぶる神代には歌の文字も定まらず、すなほにして、ことの心分きがたかりけらし、人の世となりて云々。**めでたかりし**云〻同序古注に「おほさざきのみかどの難波津にて皇子ときこえける時に、東宮をたがひに譲りて位に即き給はで三年になりにければ、王仁といふ人いぶかり思ひてよみ奉りけるうたとあるをいふ。**又浅香山の**云〻萬葉集の歌「浅香山かげさへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに」を、古今集の序の古注に「葛城のかみはぎみを陸の奥へ遣したりける時に、國のつかさ、ことおろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女のかはらけとりてよめるなり、これにぞおほぎみの心とけにけるとあるをいふ。**鄙人**田舎人。**近江の海の**好ける心に今ぶを近江にかけ、さゝ波や浪と続く。さゝ波は近江國に冠せ用ゆる詞なるをこゝには轉倒して出せり。**濱の真砂は**云〻同序に「浪のまさごの数多くつもりぬれば」。又「紀喜哲よむともつきじ」荒磯海の浜の真砂はよみ盡すとも」。**青柳の糸**云〻同序に「たとひ時うつり事さりて、たのしびかなしび行きかふとも、この歌のもとある事をや。青柳の糸絶えず松の葉の散りうせずして、きさきのかづら長く傳はり、鳥の跡久しく止まれらば」云々。鳥の跡とは、呂氏春秋に蒼頡が鳥跡を見給めて書契を作るといふ故事に基きて文字のことを云ふ。**我がせこが**云〻古今集に出でたる歌。赤間集の序の古注に載す。日本藤原の宮に住はせ給ひし時、天皇、皇后を怨りて表通姫を書紀允恭天皇の條に、姫の心をうかゞひ給ふに、姫それを知らずして、よみたる歌と記したり。下の句「くものたえまに幸し給ひて密に行ひにても知らるゝとなり。**衣通姫**允恭天皇の皇后の妹。名は弟姫。しばく天皇に召されしも、皇后の嫉妬の隨ひ奉らざりしが、後いなみ奉り敬すべし。日本書紀に「容姿絶妙なり、其艶色衣より徹る、是を以て時の人名づけて衣通姫と云ふ（譯文）」とあり。**小野小町**傳明ならず。晩年落魄したりといふは多く「花びぬれば」の歌に附會したる作り事なり。小野氏系圖に「出羽守良實、小野篁二男、大内記石見守陵生第也（中略）有女二人、妹名小町、歌人也」とあれど、それにては時代合はず。**衣通姫の流**古今集の序に「小野小町は古の衣通姫のながれなり」。**花びぬれば**云〻古今集の春の歌。意は、世に住みわびぬれば根なき浮草の如くいづくへなりと詞書して出たる小町の歌。歌の大江氏系圖に平城天皇五世の孫、千古の子、内匠頭従五位下維明とあり。「閨書」の解参照。**色見えで**云〻古今集の小町の歌「色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」。色あるよとなり。心の花とはこゝにては恋の情。**色見えでも袖にたまらぬ**云〻古今集に「一もつ出ける日奥せい法師の導師にて云へりける詞を歌によみて小野小町がもとに遣はしける返事に「雲寺に人のわざせ安部清行の歌。末句「涙なりけり」。涙の雨、雨降る身、何知らん、古事、悪事、草の花、花一をれたる身、一をれたる身、白露と云ひつゝ、**思ひつゝ**云〻古今集の小町の歌「人を思ひつゝ寝たる夢に見えたるなるべし、夢と知りせば覚めざらまし」。歌の意は、恋めずに居たらんものをとなり。**露行き霜来る**秋行き冬来る。身の為に衰。種花はむくげの花。**あるはなく**云〻新古今集の小町の歌「いつまで草歴に生ずる為増しゆく中に、身を数きつゝ、何時まで長らへんとすることぞとなり。**いつまで草**歴に生ずる為**はかなめの老**老を覚えず、振めの頃。**瓔珞を飾り**云〻亜遣小町子壮衰書に「家業瓔珞（中略）堆畳丹

貴(中略)、戸浮水精。瑙瑁は龍甲、水精は水晶の古字。**鷲輿**屈車の法　鷲輿は天子の輿、屈車は従属する臣下の車。それらを飾り一玉を玉衣にかく。玉衣は美しき衣。**敷妙の**　枕に冠する枕詞。**枕つく**　妻屋に冠する枕詞。**つま屋**　夫妻共寝する室。**諸行無常**　平家物語に、祇園精舎の鐘の声、諸行無常とは仏説経四句の偈の初句にて、諸物皆常住不変にあらずとの意。**老耳**　老人の耳。**逢坂の山**　大津市の南西、近江山城の国境の山。涅槃経四句の偈の第二句。是生滅法生滅滅已寂滅為楽の意。**飛花落葉の**法　春夏の序に「春の朝に花の散るを見、秋の夕暮に木葉の落るを聴き」云々。**あはれなるやうにて**法　古今集の序に「小野小町は(中略)、あはれなるやうにて強からず(中略)、強からぬは古今集に「雲かくる夕日は空にかげろふの小野の浅茅生風や渡るらむ」などあるに同じ。**かげろふの**法　新勅撰集に「張敞が画眉、柏如が同雲」などとうなるやうなるの歌なればなるべし」。をうなは女の古語。**七夕の織る**法　里会の糸竹、糸竹の手向、糸竹の手向草と云ひかく。**かげろふの**法　陽炎。野の浅茅生風や渡るらむ」などあるに同じ。**雲の上人**　里会の雲と受く。**廻らす盃**　暗に飲む酒の盃を廻すに掛く。張敞画眉、柏如同雲。**童舞**　わらは舞と称する花やかなる舞楽の一種。**呉竹の**　古今集の序に「呉竹の世々に聞え」云々。**萬歳楽**　雅楽の曲名。**豊の明**　古、新嘗祭の翌日に行はれし一節会(武家)。五節の舞は此日五人の舞姫の奏せし舞曲。**狂人走れば**法　徒然草に「狂人のまねとて大路を走らば則狂人なり」。**百年は**法　百年は夢に胡蝶となりて舞ひ遊びし荘子の故事。**堀川百首**　高倉楽潤の古楽。**枝さす**　枝を茅さすと舞のさす手とを兼ぬ。**たわすれ**　忘るといふに同じ。たは発語。袖のたわやがなるにかく。舞の手をも打ち忘れたる心。**掌裏裙**　衣の裾。**初秋の**法　続古今集に「天の川まだ初秋の短夜をなどと七夕の契りそめけん。**あさま**　朝になると、物のあらはになるとを掛く。**羽束師の杜**　山城国乙訓郡。歌枕にちがかく。

関寺小町　七月

(ツヨク)(三人)　子方　雅　児
(ツヨク)(三人)　シテ　老後ノ小町
(ツヨク)(三人)　ワキ　関寺住僧
(ツヨク)(三人)　ワキツレ　同従僧

(ツヨク)(三人)次第上　**待ち得て今ぞ秋よ。待ち得て今ぞ秋よ。**　(ツヨク)(三人)下歌　**秋よあまの星の祭を急がん。これぞ早稲**

江州関寺の小僧よ。七月七日のその祭を執り行ひ。

此山陰よ老女の庵を結びてゐん。歌道を極めたる由申せ。幼き人を

伴ひ申し。かの老女の物語をも承ら
ざりやとて存ら（日ポツレサシ上（三人）
賢と。（一時ばかり風の涼しく成たる京風と喜
はやありぬ（半上）けふ七夕の手向とて。
糸竹呂律の種こと（半上）とを書て
歌島の（日ポツレサシ上歌、（三人）首）を願の糸はへて。（半切）首を
願の糸はへて。織るや錦のはた薄。

（九丁ウ）花をも添へて秋草の露の玉琴かき
ならせ。（半切）秋風までもたよりからの。手向よ
遠よ。（半切）なべてもなき手向よ適よなべてもな
（シテ并ニ上ヨワク）朝よ（一本）露を得ざれぞ。
草衣なべての膏を隠さればぞも。おぎ
ぬよ便あり。花かつ雨の過ぐるよよつて
紅まさるよおびたり。柳ハ風よ駭かれて

二人、イヨ〳〵若きことの。
緑やうやくたれりぐ
終りの老の鶯の。百囀の春ハまれ
ぞも。昔より帰る秋いくそ老ぬ
しやあらこし方恋〳〵、
申まべき事のゝ。これい閑者
そいゝ。此事の兒たち歌をぼ私智をて
いゞ。老女の申事を聞き給ひ。歌を詠む

べき様をも。問ひ申しゝ。昔物語をも。承
らんためよ。兒たちもこれまで。ゝでゝ
そこゝ。これい思ひもよらぬ事を
承りものかな。埋ずの人知れぬ事を
あり。花薄穂よ出をべきのもあらぞ。
心を種として言葉の花。色香よ染まバ。
なでう其風を得ずらん。優くも幼き

人ごの中心よ。ぬき絵よ。ものかな　　まづ
まづ普く人の習ひいひ。難波津の歌を
以て。手習ふ人のはじめもまづ
開えのよのう　そこし歌ハ神代より始
まれども。文字の数定まらざりて。事
の心分き難かりけらし。今人の代とな
りて。めでたかりし歌を選ぜ詠み治め

詠歌あねぞそ。難波津の歌を。唱ひ
又安積山の歌。おほきみの古心を知ら
ゆるよ。これ示めでたき。詠歌よのう、
そして　手習ふ人の始めとなりて　高き
賤しき人をも分かず　都鄙遠國の
鳥人や　われらおきの底人までも

地上歌

みけるこころよ　近江の海の
濱の眞砂は盡くるとも。詠む言の
盡くるとも。詠む言の葉は盡きじ。
青柳の糸絶えそぎ。その葉の蔭より失せぬ。
種は心と思しめせ。たそび時移り事
去るとも。この歌のもじあらべ島の跡
も盡きせじや島の跡も盡きせじ！

異伝

ありがたうよ。古き歌人の詞多くそ
ぞも。女の歌は稀なるよ。老女の物事
ためしかうそゆく我がせこぞ来べき
宵なりさよの。蜘蛛のふるまひかねて
きるも。これは女の歌ばか　これは古へ
夜通姫(トオリヒメ)の物歌なり。夜通姫は允恭(インギヨウ)天皇(テンノオ)の后(キサキ)ましまし。允恭の如くわれ

らも其流をとゞめ、興よびいく　ワキ「さてい
衣通姫の流を學び給よや。幾年間
えたる小野の小町こそ。衣通姫の流
そ、ま、れ。侘びぬれば身を浮草の根を
絶えて。誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ。
これ小町の歌ばなし。
章ぐ心変せし程よ。せの中物憂かり

し。ワキ「文屋の康秀ぐ三河の守なりて
下り時。田舎なれ共心ある事も。慰めよかし。と。
われを誘ひし程よ。詠みし歌なり。忘れ
て年を経しものを。向けぞ涙の古事
の又思ひ出て悲しますよ　ワキ「不思議やな
侘びぬればの歌ぃ。我ぐ詠みたりしを
何ぞ。又衣通姫の流とて聞えつるも。小町

ありげよ年月(ネンゲツ)を考(カンガ)へよ老(オ)ひ百(モモ)よ
なほそれぞ。ただそびえ小町のながらふる
ものも。まだ此せよ。あるべきものを。今(イマ)ハ終(カギリ)よ
所もなく。身ハ小町の果ぞそよ。さのみ
なつみ給ひそよ　しでや小町そと恥(ハヂ)
かしや。色見えそでそこそ詠(ヨミ)みしものを
地上歌
うつろふものハ世の中の。人の心の花や

●陶吟

見ゆる。心(ココロ)取(トリ)かし　元又
草の根を絶えて。誘(サソ)ふ水あらば今も。
いるんぞ思(オモ)ふ恥(ハヂ)かしや　元付　イゴキ
も。袖よたまらぬ白玉ハ。人を見ぬ目の
涙の雨。古事のみを思(オモ)ぐさの。花萎(ナンシボ)れ
たる身の果までも。何白露の名残(ナゴリ)らん
思(シテ)ひつて寝(ネ)ればや人の見えつらんと

詠（地）みしも今ハ身のよ。おぼへまゝある
年月を送り迎へて春秋の。露行き霜
来つて草葉変（シテ）
生命（イノチ）飽（アキ）よ（ヨ）ぎりそ（ソ）
一日（ヒト）の。禁よ同（ヲナジ）
数添よ世の中よ。あるにしたがひ（×打切ヤ）
まで歎（ナゲ）かんそ。詠（エイ）せ事もわれながら。

×打切ヤハ、習アリ

虫（ムシ）の音も枯（カレ）たり
虚（ムナ）しき（キ）
唯（タヽ）。槿（キン）花（クワ）

そまで草の花散（チ）し。葉おもても
残りけるハ露の命（イノチ）なりけるぞ。慾（ヨク）
の昔や忍ぶ（シノブ）への身やと思ひ
時だよも。又古事よ（ヨ）なりゆく身のせめ
て今ハ又。初の老ぞ（ゾ）慾（ヨク）き。あやまれば
古へハ。一夜（ヨ）宿まても。猶（ナヲ）猶（ナヲ）を
巻（マキ）。垣（カキ）よ金（カネ）花（ハナ）を懸（カケ）け。戸（ト）のハ水精

地拍子
褄の一起き

を連ねつゝ。実(まこと)に鳳輦(ほうれん)興車(こしぐるま)の玉衣の色を飾りて歎妙(たえ)の。花づくつまやの内もて。契(ちぎり)の錦の褄の起き臥し。なり身なれども。冷(すゞ)しい埴生(はにふ)のこやまを歎き。床(とこ)なら

地
ん 者ゞ行無常を悟くるもしらず老耳(おいみゝ)よ。益もなき。峯坂の山風の。是生滅(これしやうめつ)の

理(ことわり)をも得ぞとて。飛花落葉のをり〳〵。をりふし。好ける道(みち)とて草の戸(と)の硯(すゞり)を。ならつて筆(ふで)を染めて藻塩草。書くや言の葉の枯れ〳〵も。なほ寝(ね)られぬは。女の歌なれば。まして弱からぬ女の身の弱り行くはてぞいとゞしく老の。悲しき。

やうな。老女をも伴ひ出でゝ申せ（呼）
老女。七夕の祭をも（タナバタ）
せよ（シテ）
いや〳〵老女ぢ事ハ憚りまして（呼）
程よ。思ひもよらぬぞ（地上歌）
いで〳〵そよ　何の苦しう（呼）
いぐべき。唯こゝ（ココ）許へ出でゝ（ココ）
織る糸竹の手向草。幾年経てうかげ（オホン）
うの（ホトヽギス）小野の小町の（ホトヽギス）百年よ及ばや（ヤ）

天つ星あひの雲の（オクリ）
袖も今ハ（ココ）
目もあてられぬ有様。（いう）
七夕の。そも今宵（仁口甲）
も種こ（仁口甲）の。盃を（ハルカ）受けたる（ハルカ）
白き　星祭るなり（ハルカ）

又、又、行くまでも行く。行くまでも行く。
経てこそ行く。行くまでも行く。
忘の（地）幾久しくさぞ。
萬歳楽（シテ一句子方舞）おら面白の唯今の舞の
袖やな。昔舞姫の明の五節の舞姫の
袖をこそ。五度返（カケリ上）したがこれは又七夕の
手向の袖ならば。七返（ナヌカ）こそやあるべき。
狂人（ハレ）も。老ることや。今の
（中ノ）音（ネ）舞の袖より。狂人（ハレ）こそ老りて。狂人こそ老り

地拍子（ヲ）

（ヲ）いにしへ（ヲ）百年（モヽトセ）（地上）（ヲ）（中ノ）ハ序之舞百年ハ。花よ宿り。
（ヲ）胡蝶の舞（シテ中）（地上）（ヲ）（中ノ上ノ）哀（アハレ）
（ヲ）花の枝（シテ）さま袖も（シテ）（地上）（ヲ）（中ノ上ノ）装束も
（ヲ）足弱く（シテ）たゞよひ（シテ）波の（地上）（ヲ）（中ノ）こゝも舞ふ
（ヲ）夫（ツマ）飛（トバ）せぢも。昔よる（地上）（ヲ）（中ノ）及（シ）袖はあらばこそ
（ヲ）袖（ソデ）（シテ上ノ）おら窓（マド）のいるへやな（打上ノ）さる程よ
（ヲ）初秋の短夜（ミジカヨ）ぱや（中ノ）明方の。（打上ノ）（中ノ）関寺の鐘

シテ（中二入）「鳥も頻よ　地「告げ渡る東雲の。あさま
（ト、、）　シテ（始終）「羽束
よもならべ　地「羽束師の森の木隠れも
（ト）　（カ）
よもあらで。暇申して帰るそ　地「名残よもおりてよろくと。
（ト）　（ワカ）　（上ニ入）　（モト）
木の葉屋よ帰りけり　地「百年の姥捨
（イヅ）
て。向そ小町が果の名残りけり小町が
（ウラ）
果の名残りけり。

解題

自然居士、人商人より孝行なる少女を取り戻すことを作れり。古記に記録多し。申楽談儀に観阿弥作とあれども、能作書に「自然居士古今あり」と記せり。観阿の改作に成れるにや。

謡ひ方梗概

東岸居士などと同じく勧進物にて、それより世阿弥も改作多く住吉新か。

自然居士

シテ　さて住は取らぞ（ト）なべて唯りと健やかに扱ひ、次句よりは独吟なれば少し向をとり（ト）なべて唯りと健やかに扱ひ、次句よりは独吟なれば少し向をとり

地　初の「身の代衣」は「返に心をとめよ」はさらりと扱ふ。「さ・波や」などは強み無く来り、「今は助けてたび給へ」とケヂ抜きて前よりも静

に納め、「本より数は」以下使やかにさらりと調子好く諳ひ、「岸によせくる」より平素りの調子に更へて引き締めて謡ひとゞむ。

辭解 **雲居寺** 奈良縣吉野郡東道が祖武天皇の御爲に創建せしもの。中古荒廢したりしを崇徳天皇の天治二年に賜西上人が再興せしも後復頽絶せり。其舊跡は今の高臺寺の地なり。**自然居士** 和泉國日根郡自然田村の人。初め雲居寺に住し、其弟子衆岸張士と共に登りて說法し、或時は觸設を打ち鳴木を摩りて過時の肇を傳道に誘引せりといへり。其後年大聲に食事を報ずる役僧の鐘。本は年齢に關らざりしが近世は有髮の童子を之に充つ。我國にては聖一國師の法嗣雙峰宗源に始まるといへば國師の法孫たる自然居士は喝食行者たりし人ならんか。**結願** 佛神に對する願事の終了する意。法事供養などを營む最後の日をいふ。**夕の空** 一晴の夕暮なるを云ふ。又雲のある事なども訓みし例和歌に多ければ次の月を云はんが爲に出す。**月待つ程の** 月の出るまでの間。金葉集に「夏の夜の月待つ程の手すさみ」の意。**導師** 唱導師の略。唱導師は敎法を唱へ衆生を引導するの義。法華經涌出品に「是四菩薩、於其衆中、是爲上首唱導之師」。又法會勤式の首座たる僧を導師といふ。**發願の鉦** 法會の時導師の發願文を讀まんとする時打つ相圖の鉦。發願文とは施主の願ひ事を述ぶる表白文なり。**一代教主** 一代佛敎の說主なる釋迦牟尼佛。**三世の諸佛** 過去現在未來の三世にわたる有らゆる佛。**十方の淨境** 十方は東西南北四維上下の世界。淨境は菩提薩埵の略。通常菩薩と略稱す。愛有情と譯し佛陀の次位にある者なり。**總神分** 神分とは天神地祇に法施を分與するの義。凡て法華を修する讀會に勸請し奉れんことを祈り、總神分に祖若心經一卷を演誦するの例と云ふ。これを總神分と略ふ。**般若心經** 摩訶般若波羅蜜多心經の略。唐の玄奘三藏の譯にて最も簡短なる經文なり。**諷誦** 諷誦文の略。諷誦文は佛事供養する爲に施物を添へて僧に誦經を請ふ文。前に清諷誦事と題し、次に施物を揭げ、文中に志す所の事を書く例なり。盂蘭盆經に「敬て白す」とある以下は諷誦の願文なり。**三寶** 佛と法と僧と。**御布施一裏** 衣服飯食金錢等の財物を施與するを布施といふ。ここには小袖一包と布施物として贈文に記せるなり。**二親聖靈頓證佛果** 父母の靈魂をして速に佛果を得しめたまへの意。**身の代衣** 八雲御抄に「五のこ衣は雪の降るに上に着る衣の代りに着るをいふ」とあり。養の代りに着る上衣。或には其に事寄せ、我が身代りに拂ふる衣と、我が身を責りて得たる衣との意を兼ねていふ。**供養** 佛又は亡者の靈に對して讀經燒香をいひ、飯食衣服等を僧に施與するをも亦供養といふ。或には小袖を三寶に布施を祈るなり。**西天の貧女** 西天竺に摩訶迦葉といへる貧女あり。夫婦の間に唯一枚の衣を持て武時僧の托鉢に來りしに彼の女其一衣を惜まずして與へたるなり。これを聞いた佛又は亡者の長者の子と生れたりといふこと賢愚經に出でたるを引く。**逆縁** 通例佛に敵し法を謗る等逆の所爲が遂には佛道に入る因緣となることをいふ。**先考先妣** 死せし父を考といひ、妣は逆緣結緣の意に て、三寶供養をなして逆十の自己死後の來世の爲に因緣となるなり。**人商人** 人商人の買ひ取りたる者を連れ行くは道理にて、それを遣るまじといふは道理なりとの意。**大津** 近江國なる今の大津市。**松本** 大津の東、馬場の西にて、女を誘拐して奴婢として賣買する惡徒。**遁善** 死者の冥界に於て福利を得んが爲に追て善事を修するをいふ。**かれは道理云々** 人商人の買ひ取りたる者を連接する迄をいふ。**願以此功德云々** 法華經化城喩品に出づ。「願くは此功德を以て普く一切に及して我等と衆生と皆共に佛道を成せん」と訓讀す。我には我りの佛道の二字を次の脈行に掛けていふ。**いさや白波** 貧女を奪ひ行きたるを盜賊の異稱とするは後漢の黃巾の賊、西河の白波谷より起りしにより時人白波賊と稱せしに基く。**舟無くとても** 人商人の船を追ふべき舟は此方に無くとも、洗ほどの心がけはなくてはの意。**人買舟** 人買人の來れる舟。**事ぞうよ** 事候ふよの略。**唐艫** 唐風に造古へ山田矢橋と相並びて大津への渡航ありし處。今山田は一村をなし、矢橋は老上村に屬せり。**人法捉** 廣く通用の規律。**拷訴** 罪人を拷問することゝ。其の如くなる**解さまさぬ** 荒さ。**笑止** 氣の毒なる事。**大法** 斷然。**もてあつかうて** 持て餘して、處置に苦むらんと。**聊爾** 粗忽。**狂言綺語** 常軌を逸したる戲言、面白く飾りたる語。

和漢朗詠集に「願以今生世俗文字之業、狂言綺語之誅、翻為来世々々讃仏乗之因、転法輪之縁」（白居易）とあるを胸に置きて撰る。**仕義**（ジギ）時のありさま。**つれなう**（情なく）、**志賀辛崎の一つ松**（名高し。一本松なれば連れ立つ者の無き意にてつれなき人と詠く。**そも〳〵舟の起**（以下昔の流なり。船中にての舞なれば時の興にて舟のことを誤ふなり。**みなかみ**（源流の意。此境の縁にて次に水流の意とながれ）といふ。**黄帝**（支那上古の帝王。三皇の一なり。名は軒轅。神農氏に代りて天子となる。以下の文、雪代物語に船の始は黄帝の御時（堂充）といふ海を隔て〳〵攻むべきやう無かりけり。爰に貨狄といふ臣下あり。とりふ〳〵秋の赤なるに、寒き嵐に散る柳の一葉の上に乗りつゝ、次第〳〵にさゝかにのいとはかなく〳〵も柳の葉のふるきまひを見て、げにもと思ひそめよたち乗るくものを舳につけたる舟。平安朝時代の遊り、工みて船を造らせ、おうごうを易く渡りいふ。然れば船の字を、君に追むと書きたり。又天子の御舟通常童所遊具として用ひらるゝ。ササラは之に倣ひて作りしものなり。今谷下に砕き」（仮に「谷下は山伏の谷行石こつめの修業の心なり」と説きたる拾葉抄の説に従ふ。**数珠**（神を礼拝する時、手にかけ又は揉みて敬意を表するに用ふる具。珠の数は百八箇を通例とするを以て次に百八の数珠といふ。**志賀の浦**（琵琶湖の南遶一帯の地。さゝらの具なるを高しとを兼ぬ。**手を摺る**（左右の手を揃り合せて拇又を乞ふこと。**羯鼓**（鞨鼓）

自然居士（ジネンコジ）

無季　シテ　自然居士
ワキ　人商人　子方　女（遊女）
同

四、五番目
畧二番

狂言
△「もうよい者ハ。東山雲居寺のあたりまでハ。とう〳〵自然居士をよびまひらせて参らふ。」
と申せ（カウシン）。食の座ハ。一七日（いちにち）説法を聴聞申せ（カウシン）。
△「雲居寺（ウンゴジ）詣（シテ）。
札（フダ）召されへ（メ）。
演べの。今日結願（ケチグワン）して座の。皆〳〵糸
の空（ソラ）の雲居（モヅ）寺。月

待つ程の慰めよ。說法一座演べんそ。
道す布。高座より。發願の鉦打ちな
ら。謹み敬つて白さく。一代教主釋加
牟尼寶號。三世の諸佛十方の薩埵
よ申して白さく。總神今よ般若心經。
や。これい調誦を。
これい美しき小袖よげよう

調誦文を。隨喜へ。
くる。調誦の事。三寶衆僧の布施
一裏。右志も所か。二親精靈頓證佛
果のため。身の代衣一龍衣。三寶よ供
養し奉る。かの西夫の貪女ご。一夜を
僧よ供せ一い。身の後の世の縁今
の貪女い親のため。身の代衣恨め

ふの、一二三、一二三、一二三、
しき身の代ぞ恨めしき。浮世の中を
そく出でて。先ず此諸共よ。同じ臺
よ生れんと讀みよげ給よ自然居士
墨染の袖を濡らせども。數の聽衆も
色この袖を濡らさぬ人もなし。袖を濡
らさぬ人もなし。袖を濡
方の人高人までも。われ此度都よ

より。數多の人を買ひ取りてゐる。又十四五
さありある女を買ひ取りてゐるぎ。きのふ
少しの間暇を乞ひてゐる程よやりてゐるぎ。
未だ歸らぞゐのうやたりゐる。きのふの
幼き者ハ。親の追善とやらん。申して
ゐひつる程よ。說法の座數よあらまりぞる
と存ゐ。自然居士の。雲居寺よ居座ゐ

狂言
狂よ。ござるか。越え見ようぞござるまでは　早ッル然る
べきか。早「やい。それがこそ。これよいのう急
ぎそ連れてまゐりやう。
早「用ぐある　狂言「用ぐあらばこそ連れて行け。
狂言「唯今調諷をよげ申いう狂言「何事ござるぞ
「やるまいぞ。
男の来りて追つつ行きいう程よ。

調諷をよげいうもよ

やるまいぞと申いへば。用ぐあると申いう程よ
やりてい。「あら曲もなや。始めよりかの
女ん様ありげよ見えてい。其上調諷を
よげいうも。唯小袖も書かぞ。身の代
衣と書いてあるぞ不審よいひ。
居士ぐ推量申さへ。かの者ん親の追善の
為よ。我ぐ身を此小袖よ代へて調諷を

上げたると思ひいや。さあらぬ唯今の者い
人高人(アキビト)まていやべー。かれい道理、こなたい
偏事(ヒガコト)まていい程(狂言)よりよっぽど身のそこめたる分(ブン)
まていおりいまず(狂言)△人高人ならば東國へ
下りいやべー。大津松本へ某まり行きそで
めりぞるまていい△(狂言)暫らくよっぽど出でい分(ブン)
まていおりいまず。居士此小袖を持ちて

行きや。あの女よ代へて連れて帰らりぞる
まていい△(狂言)いやそれい今日までの話説(シテ)(ツレ)
法が無よおりいやべー△いやー説法い
百日千日(ヒャクニチセンニチ)間(キコ)めされても。善悪(ゼンナク)の二
つを辨(ワキマ)へんためぞかー。今の女い善人(ゼンニン)。
高人(アキビト)い悪人(アクニン)。善悪(ゼンナク)のこ道ことよ極(キワ)まつ
ていいうよけふの説(ツル)法いこれまでなり。

願以此功徳普及於一切。我等與衆
生皆共成佛道。修行のためなれば
身を捨てん人を助くべし」今出でく。
そこもいきや白波の。この毎路をや。
急ぐらん　「毎なく「地」「道」ところを。そもく誰くれの
其方毎へ物申さう
「これい山田矢橋

の渡毎そもものを。何しよ招もせ
給よらん　「われも旅人なおらざれば。
渡の毎も申さぬこそ。其方毎へ物申
「さて此毎をば何毎と御覧じ
てぞ　「其人買毎の事ざうよ　「おく
音高く。何と何と　「道理道理。餘所
も人や白波の。音高くとも道理なり。

ひとかいて申しつるは。其舟漕ぐ櫂の
事ぞよ　櫓（ロまぢ右上）
あり。ひとかいて云よ櫂はあるよ　ヌの
煙の霞をば。一霞（かん上）二霞。一の二へんん
どのへば。今漕ぎ初むる舟なれば。一櫂
舟とへ（甲乙ニ・ぢ下ニが）解事（ニ兄下ト）
られたり。偖と何の用やらん　とれい

（ロ半カん上）自然居士と申せど。説経者とてゐど。説法
の場さまさま申せど。怨霊しよ来りたり
説法（ぢん）よ道理を演べ給よ。われらよ僻
事（コト）おきものを　（シテ）もア僻事（コト）とも申さぢ
ここそとよくよ。もそのふ袖ふ糸らもる。
舟よ離れて（カナ）遠おちでよ。装束（スソ）を波よ浸
つて。（フなバタ）舟よ取りつま（ト）ら停む　（ロ早）あら

腹(ハラ)をもやさりなぐら法衣(コロモ)よ恐(オソ)れて得(エ)ハ
打たぬ。これも法(ノリ)の科(トガ)ぞて。檜擢(カイ)を
もつて(ムタ)さんざ(サンザ)打つ シテ打たれて聲
の出でざるハ。若(モ)し
ワキ 何(ナン)よ空(ムナ)くやなりつらん
見れば 身(ミ)より縄(ナワ)ハ綿(ワタ)の纏(クワ)
をはめ。注げ(ツゲ)も聲(コエ)が出でぬぞて

地拍子 注げも聲が出(ヅ)。

シテ 何
あら不便(ビン)の者や。やて連(ツ)れて帰(カエ)り
ぞるぞ心安(ヤス)く思(オモ)ひめ シテ
身より出(イ)ずより 此者を賜(タマ)りめ。
小袖を召(メ)されひよ
ワキ 糸(イト)らせたくハめ
シテ 何事(ナニゴト)ぞて
大法(ダイホウ)のハ。それを

買ひ取つて再び返さぬ法をして程よ。
得ん為ら せ ひまで
らぐ中よも堅きよ大法のひ。ひまよ身を
徒よなも者よ行き達ひ。若し助け得
ねば。再び庵室へ帰らぬ法をして程よ。
其方のはをも。破るまで。又こなたの法
をも。破られ申もまで。所詮此者と連れ

おも者よ行き達ひ　トモ
帰らぬ法をそ　トモ

て奥陸奥の國へ下るとも。母よりい
下りまづくも　母よりおくれ
拷訴をいたすう
の行　命を取らう　命をとるとも
ふつと下りまづい　なよて命を
取るともふつと下りまづいそばや
おくくの事　いや此自然居士よもて

あつかうてゐよ。のう渡りゐう　呆ヅル何事
まてゐぞ　呆「さてこれい何と仕ゐべき
呆ヅル「これい持返て無うてハ通ひゐまず。よく
よく物を案じゐよ。奥より人商ひの
都より人よ買ひもあねて。自然居士と
申せ説経者を買ひ取りたるなん
ど申ゐぞ。一大事ぢやほどに程よ。お返
無うてハ通ひゐまず　呆われらもさやう
よ存ぢさりあぐら。たゞ返せバ無念ゐ
程よ。種々(イロイロ)とよおぶつて(呼ブル)尤然(モットモ)(呼ブル)べう　呆のうく自然居士急い
で毎より時あがりゐへ　呆(シテ)いやく　聊(リョオジ)爾(ジ)
まゐりまづくゐ　呆何の聊爾の爾のゐべき
唯(ナガ)時より(シテ)へ　呆(シテ)あゝ　聊爾(リョオジ)ハ頭殿(ヒンドオドノ)のお顔の

おくりも

色こそ直つてゐやうとも直りはまづ。又これなる人の申されやう。今度始めて都へ上りてゐぐ。自然居士の舞の事をこそ聞及びてゐ。一さし舞うて御見せあれと申されば　シテ　總じて居士の舞まふたる事はなくは　ワキ　それは偽ぢやの。一年今の如く芸法を演べひ

一時。　ツレ　聽衆の眠覺さんと。高座のよそにて一さし舞ひあり。事。奥までもその聞えある程よ。一さし舞ひ　シテ　おうそれは狂言綺語ぢやある程よ。さやうの事もいぐべー。舞をまひいちで此者を賜ぶりいべきか　ワキ　まづ舞を見て。其時の仕儀よつて。知らせいべー。これ

よ。烏帽子のいでこれを召して。御舞ひ候へ」

物著（シテ）「よく〳〵物を案ずるよ。終にはこ此者を賜はらんぞとよ。唯返せば損あり。居士を

いざ〳〵よおぶて恥を與へてそばな。

餘りよそれいつまでかあるべき」

地「何のつれなう志賀辛崎の一つ松

つれなき人の心かな、中ノ舞そもく身の

●サシクセ獨吟

起を尋ぬるよみなかみ黄帝の店宇

より事起つて

地「流傳狹く言より出で

たり

●ここよう

地「これを己ぼさんと山竜光といへる逆臣あり、

血を啜てて。攻むべき様もあり。よ赤物

●黄帝の臣下よ、倶狹といへる士卒あり。

ある時偵狹庭上の。池の面を見渡

●仕舞

せばをりふし秋の来るよ寒き嵐よ
散る柳の一葉水にうかみよ又蜘蛛と
もなりぬ。これも虚空よ落ちけるが其
一葉のよ乗りつゝ次第次第よさ
がるのいとはるくも柳の葉を吹き
くる風よ誘ひれ汀よりー秋霧の。
立もくるものふるまひげよもて思ひ
そめしより。エみて母を告遣れり。黄帝
これよ召されて鳥エを借ぎ渡りて崑
尤を易くこぼし、ア代を治め給よ事。
一萬八千歳そや、然れば船のせん
の字を地まみよもてむて書きたり。
さて又天のもとニニ九人、ニニ二顔を龍顔と名づけ
奉り。母を一葉ニニニて。云よ事此語字より

給ひしも。一切（イッサイ）の衆生（シュジョウ）を助けんためぞかし。居士も亦（マタ）そのごとく。身を谷（コッカ）に砕（クダ）きても。彼の者を助けんためなり。それ筋（スジ）の起（オコリ）を尋ぬるに。東山（ヒガシヤマ）にある御僧の。扇（オウギ）のごとき木（コ）の葉（ハ）のかたちを。数珠（ジュズ）に持ちたる数珠（ジュズ）までぞ。さらさらと拝（オガ）むにより。さらさらと云ふ事始まりたり。

かまれり。又君の御座（ゴザ）船（フネ）を。二頭（ニトウ）の鶏（ニワトリ）。二頭の鶏者（ニワトリ）。と申すも。此（コ）の代（ヨ）より起（オコ）れり。いうよ申（モウ）し。われらが母（ハハ）を。龍頭鷁首（リュウトウゲキシュ）にて。祝（イワ）ひ給ひし事。過分（グブン）なりし。そのものの。まま筋（スジ）を。摺（ス）つて。御見（ゴケン）せ。さらば（シテ）行（ユ）けとて。賜（タマワ）りぬ。早（ハヤ）く。船中（センチュウ）より。行（ユ）かばやと。思（オモ）へども。苦（クル）しからぬ。佛の難行苦行（ナンギョウクギョウ）。

居士も亦その如く。笏の数よ。百八の
数珠。笏の竹よ。扇の骨。おつそう合
せこれを摺る。處は志賀の浦なれど
さゝ波やさゝ波や。志賀辛崎の松の
上葉をさらり〳〵と笏のまねを。数
珠もてまれば。さゝらより猶手をも摺
るもの。入れ助けてたび給へ　早舞手を

手をも摺るもの。

摺るなどて取りは程よ。ものまよ羯鼓を打つて。御見せやべ。そて
未より数は波の音。羯鼓打上末より数は波
の音。寄せていや岸を。ざうざうと打ち。雨雲
迷よ鳴る神の。そろ〳〵と鳴る時は。
降り来る雨はらら〳〵はらと。笹の
竹の笹を摺り。池の水のそう〳〵と。

物著

数をよむほど積りの罪も消
らも法の道。参りや
来る。船のうちより菩提の岸よ寄せ
れて。共よ都よ
より

解題 十訓抄の一節に基き、天狗僧を誑して釋尊在世の大會の様を現せることを作れり。世子六十以後申樂談、五音曲次第等に禪竹作とあり。

謡ひ方梗概 車僧とほゞ同じく天狗物の事無し。すべて細部に泥むもとより平凡なる天狗のことなれば往取り重くなるを好まず。我慢増上慢の心を以て大まかに謡ふべし。此心得を大本として前は散命の恩を謝する意の通するやう力めて懇懃に己を卑くもてなすべく、かも淡滞りきやうはきとあるやう・サシは消強みを旨とすこしりめに山峡の心遠き氣色を謡ひ、ワキとの問答はシテの住を美はめを度として凡てすらりと淡ひて地へ渡す。後の出は帰を懐ひ靈場の有様を目前に見する心なれば、天狗としての粗大なる趣を押し包み、どつしりと物々しきこと宜しとす。地との掛合通りて熱心を以て精と重々しげに住あるやう、「四季河難の大ツレ 詰みにさらりとあるやう、シテとの問答は常の如くシテに住を深ることを大事とせず、ワキの経を越えぬ限り張扇きて確りとあるやう。後は「階ふ其時忽に」をどつしりと謡ふ。地 初の「鷲の御山を云ふ。出のサシは特に心して確りと謡ひ納むる。後は「帰命頂礼」そは確りとつけ「佛の御聲の聞えなば」と大事に、「云ふかと見れば」より注進み、止メを確りと納めて謡ひ納むる。後は初の住を飾り烈しくならぬやうに出順次第にて謡ひ納むる。後は「不思議や虚空に」そはどつしりと謡ひ行くべし。「不思議や虚空に」そはどつしりと謡ひ行くべし。「我に台蔵」より氣合をかけて運び込み、「刹那が間に」の上歌も進んで勢よく、「帝釋この時」以下かつて運び好く謡ひ納む。

解説

一代の教法

釋迦牟尼佛の一代に説きたる教。

五時八教

とせり。五時八教とは天台宗にて立する一代教の分類なり。

けづり

狀記解一難一。世阿彌の五音曲條々の闌曲音曲の本體の姿の條下に「夫一代のけうぼうは五十八けうをつくりのうたひ云々とあり。然れば當時は「けづり」とは謡はず「つくり」と謡ひしものなること明なり。

教内教外

禪宗の所説にて、禪宗以外の諸宗はすべて經論の文字言句に依りて教義を説くものなれば之を教内の宗といひ、禪宗は獨り教外別傳不立文字とて釋迦一代の言教以外に以心傳心の法なれば教外の宗といふ。

五時といつぱ

所謂

五時八教を更に說明せり。五時とは釋迦一代教の時期を區分したるもの。第一華嚴時は釋迦成道して三七日間に說きたる華嚴經をいひ、第二阿含時は十二年間(又八年とも)說きたる小乘の諸阿含經、第三方等時は次の十六年間(又八年とも)說きたる維摩經・勝鬘經の如き諸大乘經、第四般若時は次の十四年間(又二十二年とも)の諸種の般若經、第五法華涅槃時は後の八年間に說きたる法華經と更に入滅に臨みて說きたる涅槃經とをいふ。茲には前に八教とあるは化儀の四教と化法の四教とを合一していへるなり。

涅槃の際を畧せり。**四教とは**　北儀の四教とは、漸・秘密不定。化法の四教とは藏・通・別・圓なり。藏教とは三藏教の畧にて、阿含經の如き小乘の經律をいふ。同に、別圓をべチエンといふは山門派の讀み方にて　寺門派にてはベツテンと讀む例なり。**遮那教主**　遮那は摩訶毘盧遮那の畧、大日如來のことなり。**五相成身**　密教にて行者が佛身を成就する五種の階段の觀想なり。五相とは通達本心、修菩提心、成金剛心、證金剛心、佛身圓滿なり。龍樹の著大衆に通ずる教、別教とは別して大衆の某機を說く法華經をいふ。圓に、別圓をべチエンといふは山門派の讀み方にて　寺門派にてはベツテンと讀む例なり。**遮那教主**　遮那は摩訶毘盧遮那の畧、大日如來のことなり。**五相成身**　密教にて行者が佛身を成就する五種の階段の觀想なり。五相とは通達本心、修菩提心、成金剛心、證金剛心、佛身圓滿なり。龍樹の著大衆に通ずる教、別教とは別して大衆の某機を說く法華經をいふ。圓に、別圓をべチエンといふは山門派の讀み方にて　寺門派にてはベツテンと讀む例なり。**遮那教主**　遮那は摩訶毘盧遮那の畧、大日如來のことなり。**五相成身**　密教にて行者が佛身を成就する五種の階段の觀想なり。五相とは通達本心、修菩提心、成金剛心、證金剛心、佛身圓滿なり。龍樹の著

出で、歸るさ東北院の北の大路に兒等數人集りて童謠の如くなるを謠り興じて行ちけるを見、聽みて扇と取りかへて放ちやりたり。暫くして異樣の法師數人參りて、御牒を奉りて命生きて侍ればとて大會の場を見せたる事を記せり。身まかるは死ぬること。**都東北院**　東北院は長久年間、上東門院彰子の建立なり。法成寺の東北にあたれば爾か名つくといふ。近代業因鄕眞如堂の西に移轉せり。十訓抄に「東北院の北の大路にてかちらき見みて侍りつる老法師に侍りけり」云々。**かばかりの御志**　十訓抄に事にても念比なる御志には、いかでか報ひ申さざらん、然れば何ごと思召すぞ、僕だに參りこそ。等しと思すな、僕だに參りこそ。等しと思すな、僕だに參りこそ。等しと思すな

迦葉等阿難阿難陀の略。釋迦の侍者にして、釋迦滅道の日に生れ二十五歳にして出家し、釋迦の十五年、十大弟子中多聞第一と称せらる。聲聞者なり。阿難釋迦の聲教を聞いて四諦の理を悟り煩惱を断じて涅槃の法果を得る者。四種の花法華說法の時六種の瑞を現ずるが、其中雨華瑞として天より四種の花ふりくだりしこと也。四花とは大小の曼陀羅華(白蓮花)、大小の曼珠沙華(赤蓮花)をいひ、又青黄赤白の四蓮華をいふ。肝心の法門云々 十訓抄に「甚深の法門を演説したまふ」とあり。甚の字書を點じ誤り更に肝心と誤傳したるものなるべし。隨喜 他の善事を見て之に同情の心を起すこと。歸命頂禮 命を帰投して佛菩薩の足を禮すること。頂禮は自己の頭頂を以て佛菩薩には護法天童下り給ふともありて帝釋の名なし。帝釋喜見城 帝釋は須弥山の頂上なる忉利天の主、其居城を喜見城といふ。十訓抄には印度の最敬禮なり。あさま 明らさま。大會 法華經法の會座、釋迦は出世の本懐を抜き、聽衆は幾百萬と数ふ。此法華說法の儀式を現ぜしたるものなれば大會といふ。もぢり羽 羽のねぢれて自由ならざること。

五番目
畧二番

無季

ツレ 帝釋天王
シテ 天狗(前ハ山伏)
ワキ 山僧

大會(ダイエ)

ワキサシ(ツヨク)

それ一代の教法は。五時八教をはじめ。教内教外と分たれたり。五時ていへば。華嚴阿含方等般若法華涅槃。四教ていへば。藏通別圓これ藏通別圓たり。遮那教主の秘藏を受け。五相成身の峯を開きよりとの方。誰か佛法を崇敬せざらん。

げよありがたき。ちにこそ
をうつまもる。ふもとの山をうつまもる。
一佛衆の嶺よ。眞如の慧日。圓なり。
鳥。三寶を念じて。風常樂をおそつて。
げよたぐひなき。楽山なるげよたぐひ
なき楽山なり。月かげ古殿の燈を挑げ。
風ハ空廊の幕をうて。石よ塵無く
滑うなる。苔路を歩みよるべの水。あら
三尺の庵室の内へ
心淸の山洞やるしい。
早
楽内申ハ わし禪観の窓よ向ひ。心を
澄まて所よ。楽内申さんそいうる者ぞ
シテ
これい此あたりよをまひまする。客僧よそや。
われ既よ身まなるべきもの。ア憚みより
命助かり申まて事。返まも返まもありが

たまい。此事申さんために罷
出(まか)でゝ「こゝに思ひもよらぬ事を承り
いものかな。命を助け申さゞれば更に思ひ
もよらぬ」都東北院(とうほくいん)のあたりまで
の御事なり。宣(よろ)しく思(おぼ)し合(あわ)せべし。
なでふ「」の御志。なでふ「」申しあげざらん。
況(いわ)んや報恩(ほうおん)をや。何事もあれ。御(ご)辞(じ)退(たい)の事
はなくて。「」那(なん)ぢ適(かな)へ申せべし」とぞ
事のおはしまし。又「」此世の望(のぞみ)を適(かな)へ給(たま)ふ事。
山(せん)ぢの「」釋尊(しゃくそん)霊鷲(りょうじゅ)
拝み申したくこそ侍(はべ)れ。それこそ易(やす)き
御(ご)望(のぞみ)なれ。眞(まこと)をや思(おぼ)しめすべき。即ち
拝(おが)み申せべし。さらばぐら尊(たっと)しと思(おぼ)

しめまてならべ。ゆまで我がため。悪しかるべし。
（中入）
ゆまへて給よ。（地上歌）友まで返まても
約諾（打切）。返まで返まても約諾。さあらば
あれよ見えたる。杉一むらよそも寄
りて。目をふさぎ待ち給ひ。仏のもの聲
の聞えなが。其時。雨眼を開きて。よく
よく能賢く見れば雲霧。

降りくる雨の音ほろくとして歩み行
く道の。木の葉をきつて吹き上げて。
（上ゲ歌）
消よおおがり。谷より下り。おき消やうよ。
失せよけり。おき消やうよ失せよけり（来序中入）
後シテ上（出端又ハ大癋打上）それ山ハ小まき生くれを生まで。るぐ故よ
高き事をあり。海い。田きこれを獻をぞ
ゆゑよ。深き事をなまで（地上歌）不思議や
（打上）

虚空より音楽響き。不思議や虚空より
音楽響き。仏の告給ふ。あらたふとや。
雨眼を開き。あたりを見れば山も
即ち霊山とぞなりにける。大地は甘瑠璃
なり。木々七重宝樹とぞなつて釈迦如
来師子の座より現れ給へば。普賢文殊。
左右に居給へり。菩薩無量百千無数の

如く。砂のごとくに能神八部。おのく
拝し奉れば。加葉阿難の大
聲聞。加葉阿難の大聲聞。面
よ坐せり。空より四種の華降りたり。
天人雲より車より微妙の音楽を奏して。
如来肝心の一乗を説き給ひけり
もだせ。気色ぞ其時忽

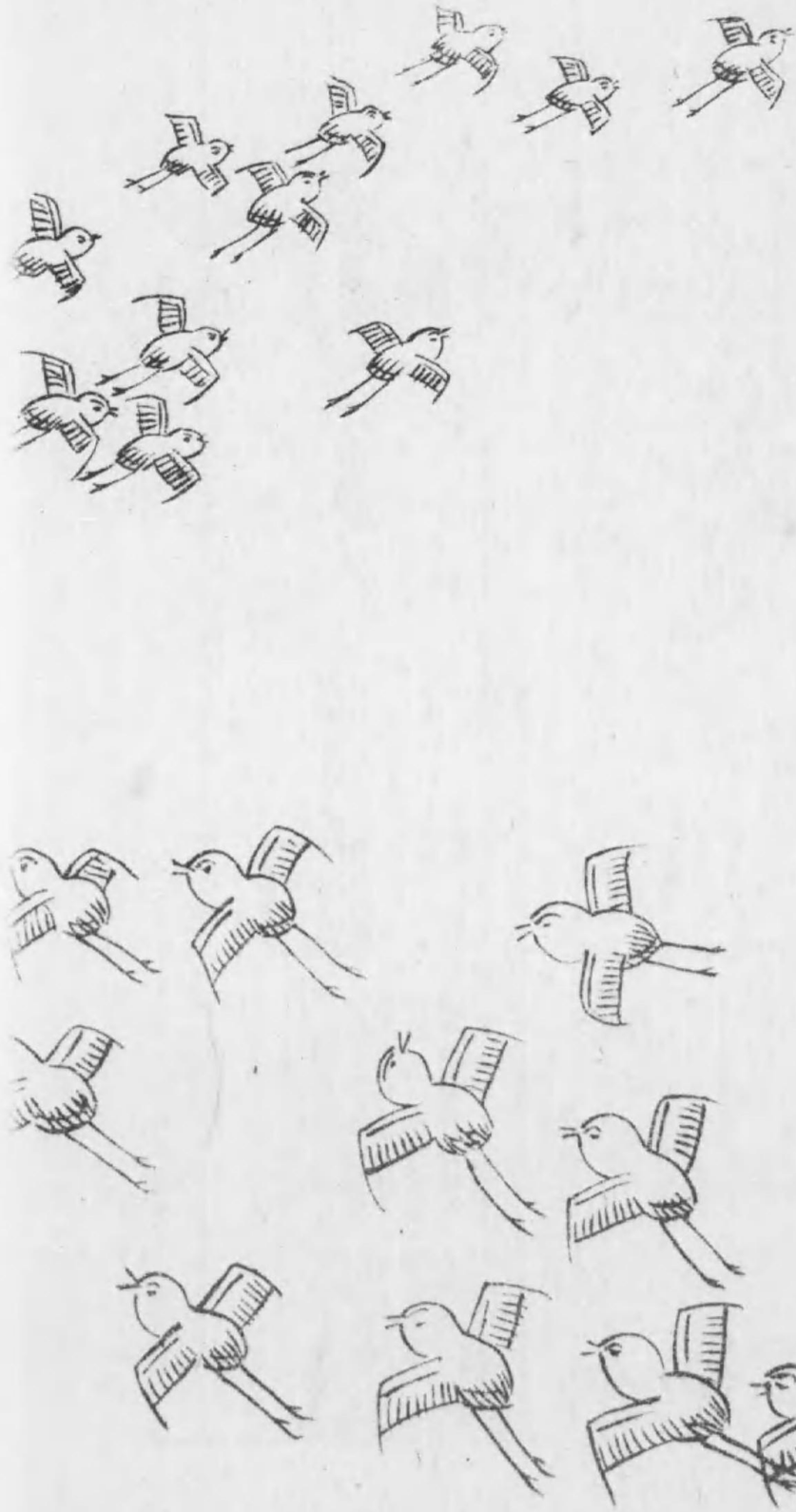
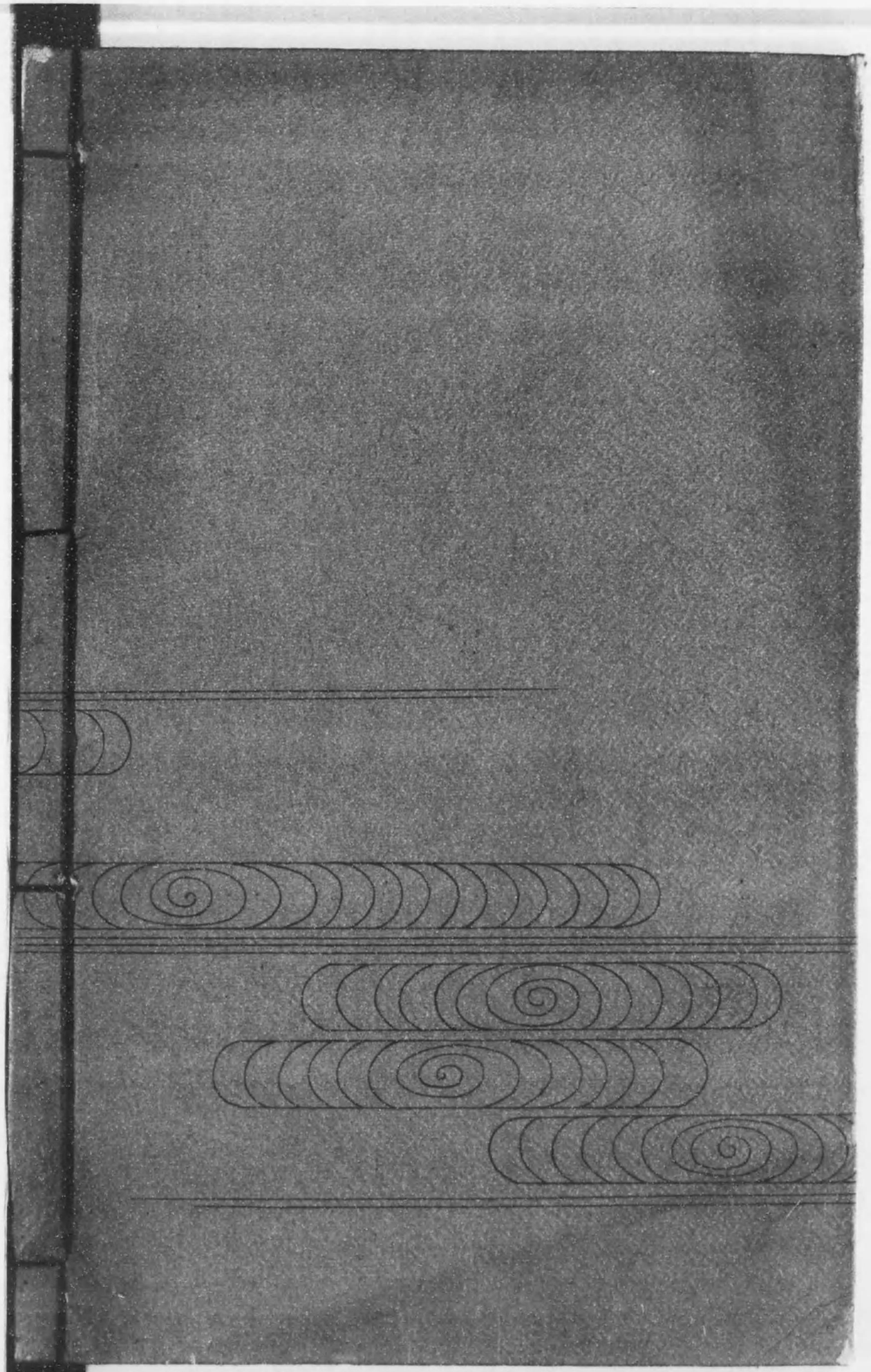
ちよ（地）「僧正其時忽ちよ。信心を起し、
隨喜の涙。眼よりみ。心よ合掌し。
帝釋加如来と。恭敬禮拜もうほどよ。俄よ台嶺響き
震動帝釋天よりより給よて見る
より天狗。おの〳〵驚き怒をなしける。
不思議さよ（上歌）（イロヘヨリ早笛）・小一郎が向よ喜見（打上打返）

城の。（打込打返）小一郎が向よ喜見城の帝釋現れ
數千の魔術と。（打込）あさましよ（打返）あり
つる大會。散り散りよなつてぞ見え
たりける（舞働打上打返）帝釋この時怒り給ひ。
（地）帝釋この時怒り給ひなでおりの信
者をなで驚かまして忽ちさんざよ
苦を見せ給へば羽風をそそて。翔らんと

をしぐも。もぢり羽よなりて。飛行も
かなわねば。恐れ奉り。拝し申せば帝
釋乃ち雲路をさして。なそらせ給よ。其時
天狗ハ岩根を傳ひ。下りて見えて。新谷の岩
洞よりぞ。出でたり。

大正十年十一月十五日 印刷
大正十年十一月二十日 發行
觀世流改訂謡本 第四版・大正版
訂正著作 丸岡桂
編纂者 丸岡明
東京市神田區今川小路三丁目九番地
發行者 土居源太郎
東京市神田區東松下町十二番地
印刷者 鈴木鋼作
東京市神田區東松下町十二番地
印刷所 信英堂印刷所
東京市神田區今川小路三丁目九番地
發行所 觀世流改訂本刊行會
電話九段 二三〇五番
振替東京 一三四七五番

125
P171



終